



# 浄土真宗のお葬式

信楽 晃仁

一月二十二日、朝日新聞に「葬式 私はいこう考える」という見出しで、特集が組まれていました。「葬式は、親しかった人や家族が集まって故人を弔い、永遠の別を告げる儀式です。(乃至)家族をどう見送るか。自分はどう見送って欲しいか。誰もが経験せざるを得ない人生のイベントについて考えます」としてその後には読者から寄せられた葬儀無用論から葬儀必要論まで、色々な意見が掲載されていました。私たちがどうも関わることになるお葬式。家族のことかも、自分のことかも知れませんが、お葬式は突然きます。予定は立ちません。だからこそ今のうちに一度よく考えてみる必要があるのではないかと思います。特に今年一月には悲しいお葬式が続きました。この悲しみの中で、葬儀をどう考えるか、私たちは問われるのだと思います。葬儀の意味を調べてみると、葬儀の役割について次の六つがあげられます。

- ① 社会的な処理…故人が亡くなった事実を関係者に知らせる役割。
- ② 遺体の処理…遺体の保冷処置、最終的には火葬して遺骨とする。
- ③ 霊の処理…宗教的に故人の霊を見送る。
- ④ 悲嘆の処理…遺族の悲しみを和らげる効果がある
- ⑤ 感情の処理…人が死ぬと、残された人たちの心がざわつきます。儀式を通してそれを緩和する効果がある。
- ⑥ 教育的役割…大切な人の死から学ぶこと。

私たちが葬儀をすることで、このような六つのがなされていくわけですね。その上で浄土真宗の葬儀はどのような意味で読経し作法が行われているかというと、『葬儀規範解説』に「浄土真宗における葬送儀礼というのは、本願を信じ念仏するものとして、故人も後に遺されたものも、阿弥陀仏に等しく摂め取られていることに対する「報恩感謝」の思いをめぐらせる場となるものであり、また人生の拠り所を阿弥陀仏の浄土に見据えて歩ませていただくという「法縁」にであう場となるものです。」と書かれています。つまり浄土真宗の葬儀は、阿弥陀仏の働きにより故人も救われ仏となられた方と、また私たちも仏になる身と知らせて頂く、そうした阿弥陀仏の働きに対する、報恩感謝の儀式だと言うことです。その時に忘れてはならないのが、「本願を信じ念仏をするものとして」との言葉です。私たちは、お育てにより「本願を信じ念仏をするもの」として日々の勤行、ご法事や、仏事をお勧めします。やはり生前「本願を信じ念仏するもの」の葬儀は安心です。みんながそうであれば、浄土真宗にお



いては「霊の処理」ではなく、仏様の働きであり、阿弥陀仏による教育的役割だといえます。

先般お父さんを亡くされた四〇代の男性が、「あれから毎朝、仏壇にお参りしています。こうしていても間違いはないでしょうか。」と満中陰でお聞き下さいました。有り難いことに阿弥陀仏の教育的役割が届いています。

他宗や一般の葬儀では、読経を亡くなった故人の為の追善供養として、引導を渡して、この世への執着を絶ち、成仏を願ったりして、霊の処理を行う僧侶や、それを願う遺族もいます。しかし浄土真宗は既に阿弥陀仏の救いの中であることを、故人も遺族も会葬者も確認させていたのです。今生の別れば悲しく、寂しいかも知れません。しかし儀式を勤める中で、阿弥陀仏に救われて必ず仏になること。そして同じ浄土でまた会うことができることを私たちに教えてくれているのです。そのような意識で、葬儀が大切にお勧めできればと思います。悲しみや寂しさの中にも必ず安心感が生れるはずですよ。



# お念仏のしずく

## 仏教の教えること:



脱ぎながら成る、なりながら脱いでいく、この脱皮と成長、成長と脱皮を限りなく繰り返していくのです。先ほど申したタテ軸とヨコ軸がクロスする地点に、どれだけ近く立ちたかという点でもあります。現実の私たちは、なかなかそこに至りません。思うように脱皮も成長もできませんが、それをめざして、懸命に一人ひとりが教えを学び、ダルマを学びながら、常にきびしく自己自身を問い続けて生きていく。これが仏教が目指すところの基本の目標だと申してよいと思えます。

仏教は、そういう人間の現実の生きざまを問い、まことの人間の生き方を教えるわけであり、そういう一人ひとりの人格主体を成長させていくというところであり、それは別の言葉で言うならば、そうは成っていない私が、仏法を学びながら、少しずつ成っていく、自己を問いながら少しずつ育っていく、このことが仏教の根本の性格であります。

だから仏教は、一般の宗教が、まず絶対者としての神の存在を語って、そういう絶対者を是認し、その絶対者の神と、私との関係の中で、人間の生きざまを教えるものとは違います。仏教は、そういう人間と絶対者との二元論的な発想に立つものではないと断言します。仏教とは、この宇宙、世界を貫くところの普遍の原理、ダルマを学びながら、それにもとづいて、私自身の存在を問いつつ、私自身の理想的なありようを徹底して尋ねていく、そしてそのように成っていく、育っていく。このことがグー

「真宗の大意」

## 暮らしの中の仏教語

### 「一大事(いちだいじ)」

「殿、天下の一大事」などという、天下のご意見番、大久保彦左衛門でも登場しそうな情景です。「わが社の一大事」「大事の前の小事」など日常でも使われる言葉です。

『法華経』に「諸仏世尊は、唯一大事の因縁をもつての故に、世に出現したもう」という文があります。お釈迦様は、ただ一つの偉大な目的と仕事のために、この世に現れたといえます。その目的と仕事とは、佛の智慧を、凡夫に教え(開)、示し(示)、理解させ(悟)、その道に入らしめる(入)事である、と説いています。つまり、仏がこの世に現れたのは、衆生を救済するためだけだということです。これが「一大事」です。

『真宗新辞典』によると仏の「一大事」とは「釈迦がこの世に出現された目的は、愚悪の凡夫を救うため、弥陀の本願を説きあらわすこと」であり、衆生の「一大事」とは「弥陀に救われて浄土に往生すること」と説明しています。

浄土真宗では「後生の一大事」と言う言葉を使います。後生とは今生、現生に対する言葉です。今この私の命が、これからどうなっていくのか、そのことをしっかりと聴聞すべきだと、お示し下さいます。仏の「一大事」は衆生の「一大事」です。さてわたしにとつての「一大事」とは、どんなことでしょうか。

## マッチ棒クイズ

マッチを1本動かして、計算式を正しくしてね!

①  $7-4=5$

②  $0-4=5$

③  $3-8=0$

- ①  $7-4=3$  (5本動かす)
- ②  $0-4=5$  (2本動かす)
- ③  $0-4=5$  (2本動かす)